人口問題研究（J. of Population Problems）61－4（2005. 12）pp. 39～56

特集：「世代とジェンダー」の視点から見た少子高齢社会の国際比較研究　その1

世代とジェンダーの視点からみた相談ネットワークの選択

星　　敦　士*

本稿では「結婚と家族に関する国際比較調査」から得られた複数の場面・内容における相談相手の選択の状態を概括するとともに，相談相手の選択を規定する個人属性の影響について，特に世代とジェンダーを中心に検討した．

分析の結果から以下の知見がえられた．第一に，男性は女性に比べて，いずれの相談内容においても配偶者を選択する確率が高く，この傾向は社会経済的地位をコントロールした場合でも一貫している．第二に，多くの相談内容において高齢層ほど相談相手が親族のみによって構成されていることが明らかになった．また若い世代では配偶者，友人・知人，自分の親といった相手をサポートの担い手として選択しているのに対して，年齢が高くになるに従って，自分の子ども，兄弟姉妹へと相談相手を移行させている．このように相談相手を変化させることによって多様性を維持する傾向は特に女性においてみられた．第三に，相談相手の選択に対して教育程度と従業上の地位が与える効果は，その内容によって異なっており，教育程度や従業上の地位によって相談相手の選択が影響を受けることが示されたが，一定の傾向を見出すことはできなかった．

本研究において明らかになった相談相手の選択における男性の配偶者に対する依存傾向は，女性の社会進出とともに男性も家庭内において家事や育児を分担していく必要があることを考慮すると，女性のみならず男性に対しても情緒的サポートを充実させていくことの必要性を示唆している．

Ⅰ．はじめに

近年，社会科学の諸領域において様々なアプローチが試みられている「社会関係資本(social capital)」に関する研究が示すように，パーソナル・ネットワークの構造的特性は，個人の行為・行動・意識などに対して，個人属性には帰属させることのできない多様な機能を果たしている．

特にサポート・ネットワークとして認識される個人にとって助けとなる人々の存在は，直接的な手助けや役割の分担といった道具的・手段的サポートとして，あるいは相談といった情緒的・心理的サポートとしてなどその種類と作用する局面こそ異なるものの，個人にとって貴重な資源となっていることが指摘されている（浦 1992）．

これらネットワークの構造が，個人の社会的属性によって大きく異なることは多くの研究によって指摘されてきた．サポート・ネットワーク，すなわちサポートの担い手として期待，選択することができる対象についても同様で，例えば女性の育児ネットワークの構造と本人の就業形態が強く関連していること，ライフステージ・年齢によってサポートの担い手として期待できる対象が異なることなど，既存研究においても個人属性による影響が指摘されている．

*　甲南大学

本稿では，サポート・ネットワークのなかでも，情緒的サポートとして機能することが考えられる様々な場面における相談相手の選択に着目し，「結婚と家族に関する国際比較調査」から得られたデータを用いて相談相手として選ばれたサポート資源の状態を概括するとともに，そのような相談相手の選択を規定する個人属性の影響を世代とジェンダーの観点から検討する．また，相談相手の選択における男女間の違いを明らかにすることを通じて，夫婦間の円滑な役割分担，家庭内労働の平等化を進めるために必要な今後の支援体制の在り方について，相談というサポートの情緒的側面から考察する．

Ⅱ．個人の社会的属性と相談相手

社会的属性によって個人のもつパーソナル・ネットワークが異なることは，社会ネットワークに関する数多くの先行研究によって指摘されてきた．1985年に行われたGeneral Social Survey（GSS）データを用いて，アメリカにおける社会的属性とネットワークの関連を分析したMarsden（1987）は，年齢，教育程度，性別，人種，居住地域（人口規模）によって個人のパーソナル・ネットワークの構造が異なることを指摘した．それによると，高齢層ほどネットワークの規模は小さく，若年層ほど多様なネットワークをもつ．また，親族ネットワークの傾向については，女性の方が男性よりも親族との関わりが多く，男性は職場の同僚や友人関係との関わりからより大きなネットワークをもつ．

これらの個人属性のなかでも，ネットワーク形成に大きな影響を与える要因として，特に教育程度が注目されてきた．教育程度が高いことによる影響を広範囲な人間関係の形成を可能にする場（Marsden 1987）としてとらえるか，あるいは社交能力の習得（Fischer 1982）ととらえるかという解釈の違いはあるものの，教育程度の高さは広範囲で多様なネットワーク形成に寄与することが指摘されている．この傾向は日本においても同様で，大谷（1995），松本（1995）などが同様の傾向を検証している．

個人が取り結ぶ人間関係全般から，より目的や機能を限定したサポート・ネットワークに着目すると，サポート・ネットワークの構成と機能に関する研究が多くみられるが，サポート・ネットワークの形成に影響する要因を検証したものはあまり多くない．サポート・ネットワークの構成については，主に出生行動や育児支援の観点から研究が行われている．渡辺（1997）が指摘しているように，現代日本の育児の特徴として，家族のシステム境界が厚く，育児に家族外のメンバーが関わることが少ないこと，また家族内においては性別役割分業によって母親が中心的に育児に関わっていることから，大半の研究ではその担い手として母親の存在が取り上げられてきた．垣内・櫻谷（2002）によると，「ふだん子育てを手伝ってくれる人」として挙げられるのは親族のなかでも妻方・夫方それぞれの母親であった．子育てに関する情報源や相談相手としては友人や夫も挙げられているが，実際の手助けとなると大半のケースで親族，特に母親が担い手となっている（垣内・櫻谷 2002：39-40）．

また，国立社会保障・人口問題研究所が1998年に実施した「第２回全国家庭動向調査」

によると，出産・子育てにおけるサポート資源について，どのような生活場面においてもほとんどが人的サポート資源によって担われており，なかでも回答者の周囲にいる親族サポートの果たす役割が大きいこと，また出産や子育に関する相談相手として両親（とくに母親）が夫よりも頼りにされていることが明らかにされている（国立社会保障・人口問題研究所 2003）．夫以外の育児協力の求め先をインタビュー調査から明らかにした野口・新川・多賀谷（2000）においても，相談相手としては妊娠・出産前後にできた友人に，実際的な手助けの担い手としては義母あるいは実母・実父に回答が集中している．

就業女性の育児資源を職種別にみた仙田（2002）は，専門職の場合にやや親族外に頼る傾向があるものの，他の職種では育児資源のほとんどが本人と夫と親族の組み合わせのいずれかとなっていることを示している．

このように日本におけるサポート・ネットワーク，特に現実の育児における具体的な手助け，あるいは情緒的サポートの資源は，主に親族，なかでも母親に集中しているものの，一方で世帯外に広がる親族・非親族ネットワークの存在も，子どもをもつこと，あるいは育児に対する不安やストレスを低減させることが指摘されている（稲葉 1999，松田 2001など）．

ではどのような要因によってサポート・ネットワーク形成が影響を受けているか，という点については，社会ネットワークに関する先行研究から，年齢や性別，教育程度による効果が予測されるが，サポート・ネットワーク特有の現象も指摘されている．例えば，川浦［他］（1996）によると，ネットワークを構成する人々の多くが親族，特に家族によって形成されていること，なかでも配偶者は重要なエージェントとして位置づけられ，その配偶者を選択する割合は女性よりも男性に多いことが明らかにされている．女性は配偶者や子ども以外に，親・きょうだい・友人知人をサポートエージェントとして組み込んでいるのに対して，男性はネットワークの広がりが狭く，配偶者への依存度が高い（川浦［他］1996：338）．パーソナル・ネットワークに関する研究では女性において男性よりも親族比率が高いことが指摘されてきたが，サポート資源に特化すると異なる傾向が示されている．男性のサポート・ネットワークの狭さについては，Thompson（1989）などにおいても指摘されており，サポート・ネットワーク形成については，会話や親しさといった点から測定されるパーソナル・ネットワークの形成に関する知見とは異なる特徴も見受けられる．

本研究では，ネットワーク形成に影響を与えると考えられる性別，年齢，教育程度，職業的地位を要因として含めながら，相談という観点からみたサポート・ネットワークの選択がどのように行われているのかを検証することとする．

Ⅲ．データ

本研究が分析するデータは，2004年２月に実施された「結婚と家族に関する国際比較調査」である．本調査は日本全国の18～69歳の男女を母集団として，15,000人を無作為抽出している．有効回答票数は9,074票（有効回収率60.5%）であった．なお以降では，相談

相手として挙げられる条件を一致させるため，基本的な分析対象を有配偶の男女6,728人とする．

Ⅳ．相談の有無と相談相手

「結婚と家族に関する国際比較調査」では，「仕事・職場」「恋愛・結婚・夫婦関係」「親との関係」「子どもの教育・子育て」の各項目について，過去１年間における相談の有無，および相談相手の続柄（２つまで）を尋ねている．

社会ネットワーク，とくにサポート・ネットワークについては，実際の経験ではなく何らかのサポートが必要な状況を回答者に想定させたうえで，担い手となりうる対象を挙げさせる形式をとる場合もある．しかし，本調査では過去１年間という時間的制約を設けた上で回答者の実際の選択結果をとらえていることから，調査時点における認知や希望ではなく実情を把握することが可能となっている．

はじめに，図１から図４はそれぞれの項目について性・年齢別に，過去１年間における相談経験の有無を表したものである．仕事・職場についての相談経験は29歳以下のカテゴリにおいて男女差がみられるものの，他の年齢層では男女に大きな差はなく，高齢層になるに従って経験ありとした割合は低くなっている．その他の相談内容については，総じて

図１　相談の経験がある割合（職場・仕事について）

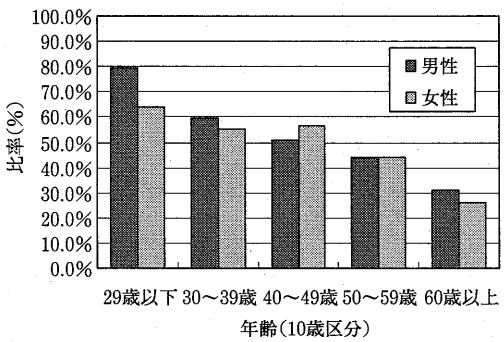


図２　相談の経験がある割合（恋愛・結婚について）

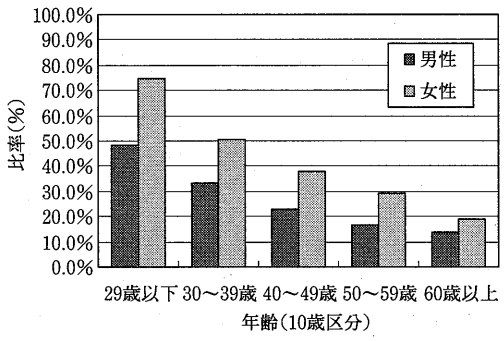


図３　相談の経験がある割合（親との関係について）

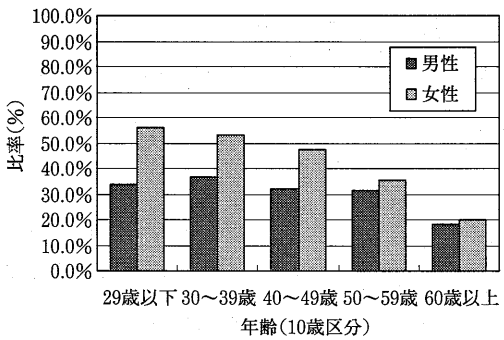
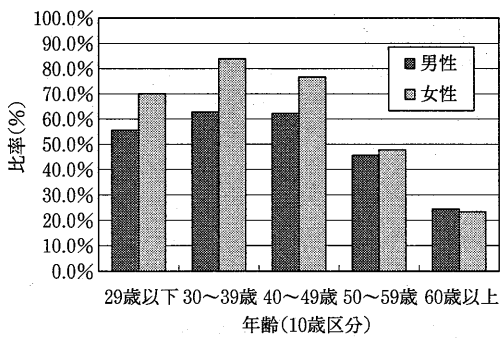


図４　相談の経験がある割合（子どもの教育・子育てについて）



女性の方が相談経験ありの割合が高い．年齢カテゴリ間の差についてみていくと，恋愛・結婚・夫婦関係についての相談は男女とも年齢が高くなるごとに割合が低くなっているが，親との関係についての相談は男性が59歳以下の各層でほぼ横ばいとなっており，また子どもの教育・子育てについては男女とも30歳代をピークとした山型となっている．これらの傾向から相談内容はそれぞれのライフステージに応じて変化していることが読み取れる．

本調査ではそれぞれの項目についての相談経験の有無を尋ねているので，それらを用いて性・年齢別に平均的な相談種類数を算出して表したものが図５である．各年齢層において男性より女性の方が相談の種類数が多く，また年齢が高くなるにつれて平均的な種類数は減少している．20歳代の女性はここで挙げられている４項目のうち２～３種類の事柄について相談を経験しているが，60歳以上のカテゴリでは１種類程度となっており，若い年齢層ほど複数の事柄についての相談を経験している．

図６は性別にみた相談内容の組み合わせを示したものである．本調査で提示した４つの項目すべてについていずれの相談も経験していないケースは男性の方が高く40.2%，女性は28.4%となっている．相談の経験があるケースでは，すべての項目について相談の経験があるとした者の割合が最も高く，次いで男性では仕事・職場のことのみ，女性では子どもの教育・子育てのみという者の割合が高い．ただし，相談の内容として含まれるか否かという点からみると，男女とも「子どもの教育・子育て」を含んでいる者の割合が最も高く，男性の44.5%，女性の57.9%が，過去１年間に子どもの教育・子育てについて誰かに相談していた．

では，それぞれの相談内容について，どのような対象が相談相手として選ばれているのだろうか．以降では４つの項目

図５　相談の種類数（平均値）

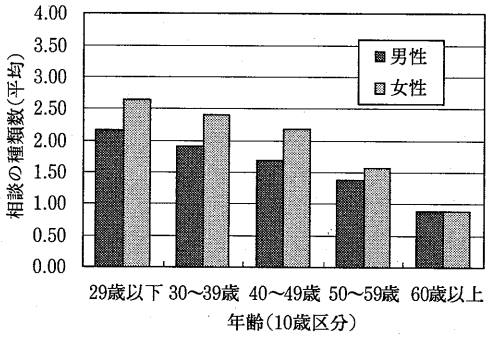
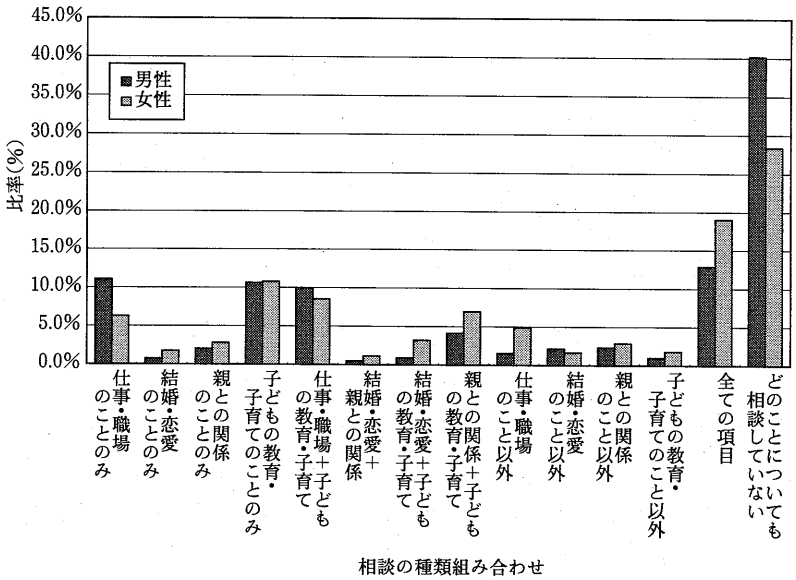


図６　相談の種類組み合わせパターンと性別



ごとに，相談相手として選ばれた続柄をみていくことにする．

表１から表３は相談内容・性・年齢別に各続柄が相談相手として選択された割合を示したものである．まず仕事・職場についての相談相手として選択された続柄については，男女とも配偶者と友人・知人が多く，若年層では回答者の母親の選択される割合が高い．しかし男性は相談相手として配偶者を選択する割合がすべての年齢層を通じて高いのに対して，女性は30歳以上の各層で同年代の男性よりも配偶者を選択する割合が低く，高齢や死亡などの理由によって回答者の母親の選択割合が低くなると同時に息子・娘を選択する割合が高くなっている．このような結婚相手を相談相手として選択する割合にみられる男女差は，以降の３項目についても同様の傾向が示されている．

表１－１　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（男性）

	仕事・職場についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	68	20	11	2	5	3	0	35	0	8
	76.4%	23.5%	14.1%	2.3%	6.3%	3.4%	0.0%	39.3%	0.0%	9.0%
30-39歳	289	37	25	1	2	10	1	124	3	12
	86.5%	12.0%	9.0%	0.3%	0.7%	3.0%	0.4%	37.1%	0.9%	3.6%
40-49歳	303	19	22	6	4	21	4	127	7	13
	83.9%	6.2%	9.9%	1.9%	1.8%	5.9%	1.2%	35.2%	1.9%	3.6%
50-59歳	327	12	8	0	0	18	29	158	4	10
	82.6%	4.9%	6.5%	0.0%	0.0%	4.7%	7.9%	39.9%	1.0%	2.5%
60歳以上	230	4	1	1	0	18	30	66	2	12
	83.3%	7.4%	4.3%	1.2%	0.0%	6.6%	11.2%	23.9%	0.7%	4.3%
合計	1217	92	67	10	11	70	64	510	16	55
	83.6%	9.2%	9.2%	1.0%	1.5%	4.9%	4.9%	35.0%	1.1%	3.8%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

表１－２　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（女性）

	仕事・職場についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	103	46	3	5	0	15	0	49	0	1
	81.7%	37.1%	2.8%	4.2%	0.0%	12.4%	0.0%	38.9%	0.0%	0.8%
30-39歳	335	98	11	22	0	33	10	182	0	7
	80.7%	25.5%	3.2%	5.9%	0.0%	8.1%	2.7%	43.9%	0.0%	1.7%
40-49歳	357	45	4	10	1	31	60	226	6	7
	74.8%	11.5%	1.5%	2.9%	0.4%	6.6%	13.5%	47.4%	1.3%	1.5%
50-59歳	290	21	3	5	0	33	90	162	6	15
	71.3%	9.0%	2.8%	2.8%	0.0%	8.2%	23.6%	39.8%	1.5%	3.7%
60歳以上	155	4	0	0	1	14	50	48	4	5
	77.5%	9.1%	0.0%	0.0%	25.0%	7.2%	26.9%	24.0%	2.0%	2.5%
合計	1240	214	21	42	2	126	210	667	16	35
	76.3%	18.2%	2.5%	4.0%	0.3%	7.9%	14.5%	41.0%	1.0%	2.2%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

恋愛・結婚・夫婦生活については，全年齢層の合計をみると男性は配偶者を選択する割合が最も高いのに対して，女性は友人・知人を選択する割合の方が配偶者を選択する割合よりも高い．また高齢層ほど子どもを相談相手として選択するという傾向も男性のそれに比べて顕著であった．

表２－１　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（男性）

	結婚・恋愛・夫婦生活についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	24	13	2	4	2	4	0	32	0	2
	44.4%	25.0%	4.3%	7.5%	4.3%	7.5%	0.0%	59.3%	0.0%	3.7%
30-39歳	126	21	8	2	3	5	0	69	1	5
	67.7%	12.0%	5.2%	1.1%	1.9%	2.7%	0.0%	37.1%	0.5%	2.7%
40-49歳	110	20	7	3	0	8	2	58	2	2
	68.3%	14.9%	6.6%	2.1%	0.0%	5.1%	1.4%	36.0%	1.2%	1.2%
50-59歳	111	3	1	2	1	8	14	34	2	3
	76.0%	3.4%	2.0%	2.2%	1.8%	5.6%	10.2%	23.3%	1.4%	2.1%
60歳以上	82	5	1	1	0	16	16	25	2	2
	69.5%	19.2%	25.0%	2.7%	0.0%	14.2%	14.3%	21.2%	1.7%	1.7%
合計	453	62	19	12	6	41	32	218	7	14
	68.1%	13.1%	5.3%	2.4%	1.6%	6.3%	5.5%	32.8%	1.1%	2.1%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

表２－２　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（女性）

	結婚・恋愛・夫婦生活についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	67	57	9	3	1	30	0	86	0	3
	45.6%	39.6%	7.3%	2.2%	0.8%	21.3%	0.0%	58.5%	0.0%	2.0%
30-39歳	154	111	9	15	0	58	5	229	2	5
	40.5%	31.2%	2.9%	4.4%	0.0%	15.7%	1.5%	60.3%	0.5%	1.3%
40-49歳	109	58	1	10	1	48	38	187	4	8
	34.6%	22.3%	0.5%	4.1%	0.6%	15.4%	13.0%	59.4%	1.3%	2.5%
50-59歳	103	35	5	4	0	43	60	118	1	5
	39.0%	23.2%	6.8%	3.0%	0.0%	16.5%	24.0%	44.7%	0.4%	1.9%
60歳以上	66	4	0	0	0	25	40	36	1	6
	48.9%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	19.2%	31.3%	26.7%	0.7%	4.4%
合計	499	265	24	32	2	204	143	656	8	27
	40.2%	28.2%	3.4%	3.7%	0.3%	16.8%	12.9%	52.9%	0.6%	2.2%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

親との関係については，男性全体の８割以上が相談相手として配偶者を含める傾向がみられるのに対して，女性は配偶者以外にも兄弟姉妹，息子・娘，友人・知人を含める割合が高く，男性よりも多様な相談相手を選ぶ傾向が示された．

表３－１　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（男性）

	親との関係についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	29	1	0	0	0	5	0	8	0	2
	80.6%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	13.9%	0.0%	22.2%	0.0%	5.6%
30-39歳	169	15	7	1	1	16	0	37	1	4
	84.5%	8.0%	4.0%	0.5%	0.6%	8.1%	0.0%	18.5%	0.5%	2.0%
40-49歳	184	12	4	3	2	29	6	26	1	3
	88.9%	6.8%	2.9%	1.7%	1.4%	14.2%	3.1%	12.6%	0.5%	1.4%
50-59歳	227	5	0	2	1	50	17	31	3	3
	85.7%	2.6%	0.0%	1.1%	1.0%	19.2%	6.7%	11.7%	1.1%	1.1%
60歳以上	130	4	1	2	0	33	17	14	5	4
	83.3%	6.0%	4.8%	2.8%	0.0%	21.4%	11.3%	9.0%	3.2%	2.6%
合計	739	37	12	8	4	133	40	116	10	16
	85.5%	5.6%	2.7%	1.2%	0.9%	15.6%	5.0%	13.4%	1.2%	1.9%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

表３－２　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（女性）

	親との関係についての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	84	34	3	1	0	23	0	37	0	2
	76.4%	31.2%	3.2%	1.0%	0.0%	22.5%	0.0%	33.6%	0.0%	1.8%
30-39歳	277	95	9	8	1	88	3	129	3	2
	72.3%	27.0%	2.9%	2.3%	0.4%	23.5%	0.9%	33.7%	0.8%	0.5%
40-49歳	262	46	3	6	2	85	32	148	0	3
	69.1%	14.5%	1.3%	2.0%	1.0%	22.7%	8.9%	39.1%	0.0%	0.8%
50-59歳	213	21	3	0	0	85	51	88	4	5
	68.7%	10.7%	2.8%	0.0%	0.0%	27.6%	17.2%	28.4%	1.3%	1.6%
60歳以上	105	2	0	1	3	27	41	15	2	3
	74.5%	3.3%	0.0%	2.7%	75.0%	19.9%	30.4%	10.6%	1.4%	2.1%
合計	941	198	18	16	6	308	127	417	9	15
	71.1%	19.1%	2.4%	1.7%	0.9%	23.8%	10.5%	31.5%	0.7%	1.1%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が１人以上いるケースに限定して集計を行った．

子どもの教育・子育てについても，9割近くの男性が相談相手として配偶者を含めているのに対して，女性は配偶者を中心としながら若年層では母親，高齢層では友人・知人，兄弟姉妹，別の子ども，といったように多様な相談相手を挙げている．

表4－1　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（男性）

	子どもの教育・子育てについての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	56	13	2	2	1	1	0	13	0	0
	90.3%	22.4%	3.8%	3.4%	1.9%	1.6%	0.0%	21.0%	0.0%	0.0%
30-39歳	332	39	13	10	3	8	2	59	4	6
	94.3%	11.8%	4.4%	3.1%	1.1%	2.3%	0.6%	16.8%	1.1%	1.7%
40-49歳	413	28	9	11	2	12	14	64	6	4
	95.4%	7.7%	3.3%	2.9%	0.7%	2.8%	3.3%	14.8%	1.4%	0.9%
50-59歳	380	13	2	6	5	10	23	61	6	5
	92.7%	5.2%	1.7%	2.2%	3.2%	2.5%	5.7%	14.9%	1.5%	1.2%
60歳以上	194	5	0	2	0	15	20	25	2	2
	88.6%	9.4%	0.0%	2.2%	0.0%	7.0%	9.4%	11.4%	0.9%	0.9%
合計	1375	98	26	31	11	46	59	222	18	17
	93.2%	9.3%	3.5%	2.8%	1.4%	3.2%	4.1%	15.0%	1.2%	1.2%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が1人以上いるケースに限定して集計を行った．

表4－2　年齢別・内容別にみた相談相手の続柄（女性）

	子どもの教育・子育てについての相談相手									
	配偶者	回答者の母親	回答者の父親	配偶者の母親	配偶者の父親	兄弟姉妹	息子・娘	友人・知人	専門家・カウンセラー	その他
29歳以下	103	67	2	16	0	13	0	44	2	3
	74.6%	48.9%	1.7%	12.4%	0.0%	9.8%	0.0%	31.9%	1.4%	2.2%
30-39歳	540	217	18	43	6	62	3	236	11	8
	85.7%	37.2%	3.5%	7.5%	1.3%	10.1%	0.5%	37.5%	1.7%	1.3%
40-49歳	550	96	11	22	3	61	28	268	14	10
	84.9%	17.6%	2.8%	4.4%	0.9%	9.6%	4.4%	41.4%	2.2%	1.5%
50-59歳	371	23	1	3	0	53	45	137	4	6
	84.9%	9.0%	0.8%	1.4%	0.0%	12.2%	10.4%	31.4%	0.9%	1.4%
60歳以上	147	4	0	1	0	16	25	28	4	3
	83.5%	8.9%	0.0%	3.7%	0.0%	9.4%	14.4%	15.9%	2.3%	1.7%
合計	1711	407	32	85	9	205	101	713	35	30
	84.3%	26.0%	2.8%	5.9%	0.9%	10.3%	5.1%	35.1%	1.7%	1.5%

注）回答者の両親，配偶者の両親，兄弟姉妹，息子・娘については該当者が1人以上いるケースに限定して集計を行った．

先にみた性・年齢別にみた相談経験の有無では，多くの項目について男性は女性よりも相談経験がなく，また相談の種類数も少ないことが示された．ここでは，それに加えて男性の方が女性よりも配偶者を相談相手として含める割合が高く，女性が母親や友人・知人，自分の子どもも相談相手として選ぶ割合が高いのに対して，相談相手の多様性に乏しいことが示された．

このことは，「2つまで」という条件で選択された相談相手の続柄の選択パターンをみることでも示される．表5は，各項目における相談相手の選択パターンとして数多く析出されたものを上位5位まで示したものである．なお，ここでは選択パターンの組み合わせ数が多くなることから性別による集計のみを行った．

この表からも明らかなように，男性はいずれの相談内容についても相談相手として配偶者のみ，すなわち1人のみを選択する割合が最も高く，特に子どもの教育・子育てについては7割近くが配偶者しか相談相手がいないことを表している．一方，女性は選択パターンの順序としては多くの項目について男性と近似しているものの，各パターンが占める割合は大きく異なる．特に，相談相手として配偶者のみを選択する割合は，男性が配偶者のみを選択する割合の半分程度であり，相談経験のある回答者の多くが配偶者＋他の誰か，というパターンを選んでいる点が注目されよう．

表5　相談相手の選択パターン（上位5位）

仕事・職場について			
男性		女性	
①配偶者のみ	45.0%	①配偶者のみ	28.4%
②配偶者＋友人・知人	21.9%	②配偶者＋友人・知人	22.8%
③友人・知人のみ	10.3%	③配偶者＋その他親族	12.5%
④配偶者＋自分の親	6.8%	④友人・知人のみ	11.8%
④配偶者＋その他親族	6.8%	⑤配偶者＋自分の親	9.5%

恋愛・結婚・夫婦生活について			
男性		女性	
①配偶者のみ	48.7%	①友人・知人のみ	22.9%
②友人・知人のみ	16.5%	②配偶者のみ	17.0%
③配偶者＋友人・知人	10.6%	③配偶者＋友人・知人	11.4%
④配偶者＋その他親族	4.2%	④その他親族のみ	9.1%
⑤その他親族のみ	3.9%	⑤その他親族＋友人・知人	8.8%

親との関係について			
男性		女性	
①配偶者のみ	60.8%	①配偶者のみ	30.9%
②配偶者＋その他親族	13.6%	②配偶者＋その他親族	16.8%
③配偶者＋友人・知人	7.4%	③配偶者＋友人・知人	14.3%
④その他親族のみ	4.4%	④友人・知人のみ	8.8%
④友人・知人のみ	4.4%	⑤その他親族のみ	7.9%

子どもの教育・子育てについて			
男性		女性	
①配偶者のみ	68.4%	①配偶者のみ	35.4%
②配偶者＋友人・知人	10.8%	②配偶者＋友人・知人	22.3%
③配偶者＋自分の親	6.0%	③配偶者＋自分の親	13.4%
④配偶者＋その他親族	5.2%	④配偶者＋その他親族	9.2%
⑤友人・知人のみ	3.4%	⑤友人・知人のみ	6.3%

V．相談相手の選択に対する個人属性の影響

前章では「仕事・職場」「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」「子どもの教育・子育て」についての相談経験の有無，およびそれぞれの相談相手に関する性・年齢別の傾向をみてきた．ここでは，性・年齢以外にも相談ネットワークの形成，相談相手の選択に影響すると考えられる社会経済的地位をコントロールして個人属性との関連を分析する．

従属変数となる相談相手の選択については以下のように操作化した．

○相談相手の選択の有無

「職場・仕事」「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」「子どもの教育・子育て」の各項目について，「配偶者」「本人の親（母親・父親）」「配偶者の親（母親・父親）」「その他の親族（兄弟姉妹・息子・娘）」「友人・知人」「専門家・カウンセラー」が選ばれているか否か（選ばれている＝1，選ばれていない＝0）．

○相談相手として選択された続柄の構造①：親族か否か

「職場・仕事」「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」「子どもの教育・子育て」の各項目について選ばれた相談相手が親族（配偶者，本人・配偶者の親，兄弟姉妹，息子・娘）によってのみ構成されているか否か（親族のみによって構成されている＝1，それ以外の組合せ＝0）.

○相談相手として選択された続柄の構造②：続柄が単一か否か

2つまでの選択という制約下において，相談相手として選ばれた続柄のパターンが「配偶者のみ」「本人の親のみ」「配偶者の親のみ」「その他親族のみ」「友人・知人のみ」「専門家・カウンセラーのみ」といった形で単一か，あるいは「配偶者＋友人・知人」といった形で複数にわたるか（単一の組合せ＝1，それ以外の組合せ＝0）.

これらの従属変数に対して，前章でも取り上げた性別，年齢，そして既存研究において個人がもつネットワーク構造に影響を与えることが検証されてきた教育年数，職業的地位（従業上の地位）を独立変数として用いる．従業上の地位については，「無職」「フルタイム雇用」「パート・アルバイト・派遣社員・契約社員」「自営業主・家族従業者」の区分を用い，「無職」を基準カテゴリーと基準とするダミー変数を分析に含めた．ただし「職場・仕事」についての相談相手の選択に関する分析についてのみ，現在就業しているケースを分析対象として「フルタイム雇用」を基準カテゴリーとした.

表6から表9は，「職場・仕事」「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」「子どもの教育・子育て」の各項目について，「配偶者」「本人の親（母親・父親）」「配偶者の親（母親・父親）」「その他の親族（兄弟姉妹・息子・娘）」「友人・知人」「専門家・カウンセラー」の各続柄が選ばれているか否かに対する個人属性の影響をロジスティック回帰分析によって検証したものである．なお，回答者の親，配偶者の親，その他親族（兄弟姉妹，息子・娘）については，それらの続柄にある者が1人以上いるケースに限定して分析を行っている．また，以降のロジスティック回帰分析の結果を示す表中の数値は推計されたロジスティッ

表6　仕事・職場についての相談相手に関するロジスティック回帰分析

	仕事・職場についての相談相手					
	配偶者	本人の親	配偶者の親	その他親族	友人・知人	専門家
性別（1＝男性）	0.523 *	-0.191 n.s.	-0.989 **	-0.665 **	-0.231 *	-0.254 n.s.
年齢	-0.008 n.s.	-0.064 **	-0.066 **	-0.039 **	-0.006 n.s.	0.030 n.s.
教育年数	0.023 n.s.	0.055 n.s.	-0.168 n.s.	-0.041 n.s.	0.023 n.s.	-0.086 n.s.
就業状態①（パート・アルバイト）	0.014 n.s.	0.355 n.s.	0.356 n.s.	0.243 n.s.	0.023 n.s.	-0.955 n.s.
就業状態②（自営・家族従業）	0.157 n.s.	0.651 **	0.801 n.s.	0.267 n.s.	-0.401 n.s.	0.364 n.s.
定数	1.136 *	-0.033 n.s.	1.296 n.s.	2.192 **	-0.241 **	-4.807 *
モデルカイ二乗値	32.230 **	83.694 **	30.589 **	90.713 **	33.682 **	8.577 n.s.

**：p<.01　*：p<.05　n.s.：p≧0.5

ク回帰係数である．

まず職場・仕事についての相談相手に関する分析結果からみていく．配偶者が選ばれているか否かについては，性別のみが有意な効果を示していた．前章でも男性の場合，配偶者を選択する割合が高いことが示されていたが，多変量をコントロールした場合でも同様の傾向がみられる．本人の親については，親が生存しているケースに分析対象を限定しても年齢が高い層ほど選択されにくくなっている．また従業上の地位として自営業主・家族従業者の場合に，相談相手として本人の親を選択する確率が高い．配偶者の親とその他親族については，男性よりも女性の方が，また年齢が低いほど選択する確率が高いことが示された．仕事・職場に関する相談相手としての友人・知人は男性よりも女性の方が選択する確率が高い．カウンセラーなど専門家についてはモデルの適合度も有意ではなく，ここで用いた独立変数のなかで有意な効果を示しているものは無かった．

表7　恋愛・結婚・夫婦生活についての相談相手に関するロジスティック回帰分析

	恋愛・結婚・夫婦生活についての相談相手					
	配偶者	本人の親	配偶者の親	その他親族	友人・知人	専門家
性別（1＝男性）	0.980 **	-0.674 **	-0.053 n.s.	-1.330 **	-0.729 **	0.373 n.s.
年齢	0.013 **	-0.038 **	-0.017 n.s.	0.047 **	-0.074 **	0.014 n.s.
教育年数	0.113 **	0.008 n.s.	-0.004 n.s.	-0.077 *	0.043 n.s.	-0.184 n.s.
就業状態①（フルタイム雇用）	0.113 n.s.	-0.347 n.s.	-0.704 n.s.	-0.001 n.s.	-0.699 **	-0.020 n.s.
就業状態②（パート・アルバイト）	-0.067 n.s.	-0.445 **	-0.493 n.s.	0.038 n.s.	-0.447 **	-1.404 n.s.
就業状態③（自営・家族従業）	0.041 n.s.	-0.540 **	-0.140 n.s.	-0.102 n.s.	-0.213 n.s.	-0.649 n.s.
定数	-2.410 **	0.659 n.s.	-2.325 **	-2.065 **	1.568 **	-2.991 n.s.
モデルカイ二乗値	150.072 **	82.130 **	5.557 n.s.	185.463 **	299.358 **	6.990 n.s.

**：$p<.01$　*：$p<.05$　n.s.：$p\geqq0.5$

次に，恋愛・結婚・夫婦生活についての相談相手に関する分析において，配偶者が選ばれているか否かに対しては，性別，年齢，教育年数が有意な効果を示していた．女性よりも男性が，若年層より高齢層において，また教育年数が高いほど配偶者を選択する確率は高い．本人の親については，男性よりも女性が，高齢層より若年層において選択される確率が高く，従業上の地位に関してはパート・アルバイト，自営業主・家族従業者において選択する確率は低い．その他親族の選択の有無については，性別，年齢，教育年数が有意な効果を示している．男性よりも女性の方が選択する確率が高い点は本人の親と同様の結果であるが，ここでは若年層よりも高齢層の方が選択する確率が高い．また教育年数が高いほど兄弟姉妹，子どもを相談相手として選ぶ確率は低い．友人・知人の選択については，男性よりも女性が，高齢層よりも若年層がそれぞれ相談相手として挙げる傾向があり，従業上の地位のなかでは雇用者（フルタイム雇用，パート・アルバイト）において選択確率が高いという結果であった．なお，配偶者の親と専門家についてはモデルの適合度が有意ではなく，分析に含めたいずれの変数も有意な効果を示していなかった．

表8　親との関係についての相談相手に関するロジスティック回帰分析

	親との関係についての相談相手					
	配偶者	本人の親	配偶者の親	その他親族	友人・知人	専門家
性別（1＝男性）	0.818 **	-0.970 **	-0.343 n.s.	-0.831 **	-0.885 **	0.340 n.s.
年齢	0.001 n.s.	-0.051 **	0.024 n.s.	0.037 **	-0.026 **	0.061 *
教育年数	0.136 **	0.030 n.s.	0.102 n.s.	-0.074 **	-0.056 n.s.	0.222 n.s.
就業状態①（フルタイム雇用）	0.003 n.s.	-0.553 *	-0.179 n.s.	0.106 n.s.	0.006 n.s.	-0.320 n.s.
就業状態②（パート・アルバイト）	-0.163 n.s.	-0.368 n.s.	-0.213 n.s.	0.151 n.s.	0.256 n.s.	-0.217 n.s.
就業状態③（自営・家族従業）	-0.101 n.s.	-0.074 n.s.	0.641 n.s.	0.122 n.s.	-0.124 n.s.	-1.706 n.s.
定数	-0.857 n.s.	0.351 n.s.	-6.369 n.s.	-1.517 **	1.018 *	-10.555 **
モデルカイ二乗値	90.501 **	118.349 **	6.272 n.s.	129.418 **	128.147 **	15.159 *

**：p＜.01　*：p＜.05　n.s.：p≧0.5

親との関係についての相談相手として配偶者が選ばれているか否かについては，性別，教育年数がともに正の有意な効果を示していた．女性よりも男性において，また教育年数が長いほど相談相手として配偶者を含める傾向にある．本人の親については，男性よりも女性が，また若年層ほど相談相手として選択している．またフルタイム雇用の場合には選択しない傾向がみられる．その他親族については，表5－2と同様に男性よりも女性が，若年層よりも高齢層が選択しており，一方で教育年数が長いほど選択しない確率が高い．友人・知人については，本人の親に関する分析結果と同様に，男性よりも女性が，また若年層ほど相談相手として選択している．

なお，4種類の相談内容のなかで唯一「親との関係」においてのみ専門家の選択に関するモデル適合度が有意であった．有意な効果を示していた変数は年齢で，高齢層ほど「親との関係」について専門家を選択する確率が高い．なお配偶者の親についてはここでもモデルの適合度は有意ではなく，分析に含めたいずれの変数も有意な効果を示していなかった．

表9　子どもの教育・子育てについての相談相手に関するロジスティック回帰分析

	子どもの教育・子育てについての相談相手					
	配偶者	本人の親	配偶者の親	その他親族	友人・知人	専門家
性別（1＝男性）	0.839 **	-0.729 **	-0.539 *	-0.760 **	-1.019 **	-0.382 n.s.
年齢	0.005 n.s.	-0.074 **	-0.048 **	0.034 **	-0.015 **	0.005 n.s.
教育年数	0.110 **	0.043 n.s.	-0.046 n.s.	-0.052 n.s.	0.037 n.s.	0.110 n.s.
就業状態①（フルタイム雇用）	0.155 n.s.	-0.699 **	-0.157 n.s.	-0.413 *	0.016 n.s.	-0.052 n.s.
就業状態②（パート・アルバイト）	0.046 n.s.	-0.447 **	-0.289 n.s.	-0.083 n.s.	0.322 **	0.356 n.s.
就業状態③（自営・家族従業）	0.052 n.s.	-0.213 n.s.	0.138 n.s.	0.014 n.s.	0.098 n.s.	0.239 n.s.
定数	0.007 n.s.	1.568 **	-0.226 n.s.	-2.557 **	-0.542 n.s.	-5.847 **
モデルカイ二乗値	83.750 **	299.358 **	35.105 **	122.652 **	206.429 **	5.145 n.s.

**：p＜.01　*：p＜.05　n.s.：p≧0.5

最後に，子どもの教育・子育てについての相談相手として，配偶者の選択の有無については，性別，教育年数がともに正の有意な効果を示していた．「親との関係」同様に，女性よりも男性において，また教育年数が長いほど相談相手として配偶者を含める傾向にある．

本人の親については，男性よりも女性が，高齢層よりも若年層が，それぞれ選択する確

率が高い．またフルタイム，パート・アルバイトの雇用者において本人の親を選ぶ確率は低い．配偶者の親については，性別と年齢の効果は本人の親と同様であるが，従業上の地位については有意な効果を示すものはなかった．その他親族については，ここでも先に示されていたように，男性よりも女性の方が，若年層よりも高齢層が相談相手として選択する確率が高い．友人・知人についても，「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」と同様に，男性よりも女性が，高齢層よりも若年層が，それぞれ選択する確率が高い．従業上の地位のなかではパート・アルバイトのみ他の地位よりも友人・知人を選択する確率が高いことが示された．なお専門家についてのモデルは適合度が有意ではなく，分析に含めた変数のなかで有意な効果を示すものはなかった．

表10は，相談相手として選択された続柄の構造として，2人までとして選ばれた相談相手が親族のみから構成されているか否かについて，個人属性の影響をロジスティック回帰分析によって検証したものである．

表10　相談相手として選択された続柄の構造①に関するロジスティック回帰分析

	仕事・職場についての相談		恋愛・結婚・夫婦生活についての相談		親との関係についての相談		子どもの教育・子育てについての相談	
性別（1＝男性）	0.210	*	0.677	**	0.704	**	0.960	**
年齢	0.005	n.s.	0.037	**	0.021	**	0.013	**
教育年数	-0.020	n.s.	0.041	n.s.	0.040	n.s.	-0.035	n.s.
就業状態①（フルタイム雇用）	----------		0.054	n.s.	0.038	n.s.	-0.111	n.s.
就業状態②（パート・アルバイト）	0.085	n.s.	-0.087	n.s.	-0.255	n.s.	-0.387	*
就業状態③（自営・家族従業）	0.475	**	-0.185	n.s.	0.152	n.s.	-0.093	n.s.
定数	0.135	n.s.	-2.256	**	-0.639	n.s.	0.636	n.s.
モデルカイ二乗値	31.289	**	131.620	**	95.374	**	177.771	**

**：p＜.01 *：p＜.05 n.s.：p≧0.5

仕事・職場についての相談相手として選ばれた2人が親族のみによって構成されている傾向は，女性よりも男性において，また自営業主・家族従業者に多い．また，恋愛・結婚・夫婦生活についての相談，親との関係についての相談については，いずれも性別と年齢が有意な効果を示しており，女性よりも男性において，また年齢が高いほど親族のみよって相談相手が構成されている確率が高い．子どもの教育，子育てについての相談は，これら性別と年齢の効果に加えて，従業上の地位としてパート・アルバイトである場合に相談相手が親族のみによって構成される確率が低い，すなわち親族と非親族の混合，あるいは非親族のみによって相談相手が構成されている確率が高いという結果であった．性別の効果はすべての相談内容において一貫しており，これは男性の親族に対する依存，特に，先にも見てきたような配偶者に対する依存傾向の強さを示している．一方，教育年数については，誰を相談相手とするかについては有意な効果を持つ場合があったものの，相談相手の構成（親族のみによって構成されているか否か）については，いずれの相談内容においても有意な効果を示していなかった．

表11は，相談相手として選択された続柄の構造として，選ばれた相談相手が「配偶者のみ」「本人の親のみ」「配偶者の親のみ」「その他親族のみ」「友人・知人のみ」「専門家・カウンセラーのみ」といった形で単一の区分に含まれているのか，あるいは「配偶者＋友人・知人」といった形で複数の続柄区分にわたるのかについて，個人属性の影響をロジスティック回帰分析によって検証したものである．

表11　相談相手として選択された続柄の構造②に関するロジスティック回帰分析

	仕事・職場についての相談		恋愛・結婚・夫婦生活についての相談		親との関係についての相談		子どもの教育・子育てについての相談	
性別（1＝男性）	0.424	**	0.832	**	0.841	**	1.013	**
年齢	0.017	**	0.025	**	0.008	**	0.036	**
教育年数	-0.009	n.s.	-0.023	n.s.	-0.010	n.s.	-0.036	n.s.
就業状態①（フルタイム雇用）	----------		0.088	n.s.	0.212	n.s.	0.380	**
就業状態②（パート・アルバイト）	-0.167	n.s.	0.077	n.s.	-0.095	n.s.	-0.026	n.s.
就業状態③（自営・家族従業）	-0.147	n.s.	0.024	n.s.	0.105	n.s.	0.165	n.s.
定数	-0.709	n.s.	-0.598	n.s.	-0.191	n.s.	-1.382	n.s.
モデルカイ二乗値	54.480	**	104.678	**	117.027	**	406.448	**

**：p＜.01 *：p＜.05 n.s.：p≧0.5

「仕事・職場」「恋愛・結婚・夫婦生活」「親との関係」の各相談内容において，相談相手の続柄が単一の区分に含まれる傾向が強いのは，女性よりも男性において，また若年層よりも高齢層である．これらの個人属性をもつケースは相談相手として選択した対象の続柄という観点から場合の散らばりがそれ以外のケースに比べて小さい．「子どもの教育・子育て」については，このような性と年齢の効果に加えてフルタイム雇用であることが正の有意な効果を示している．従業上の地位としてフルタイム雇用である場合に，相談相手の構成は単一の続柄になる確率が高い．

Ⅵ．結論

本稿では「結婚と家族に関する国際比較調査」から得られた複数の場面・内容における相談相手の選択の状態を概括するとともに，相談相手の選択を規定する個人属性の影響について，特に世代とジェンダーを中心に検討した．分析に用いた個人属性ごとにその効果をまとめると以下のとおりである．

○性別の効果

男性は女性に比べて，いずれの相談内容においても配偶者を選択する確率が高く，この傾向は社会経済的地位をコントロールした場合でも一貫している．このような配偶者への依存傾向は，既婚者のソーシャルネットワークとソーシャル・サポートについてその担い手の男女差を検証した川浦［他］（1996）などの知見とも一致しており，本調査データのように相談相手を場面や内容によって区分した場合にも同様であることが明らかになった．一方で男性であることは，本人の親や兄弟姉妹，子どもの選択に対しては有意な負の効果を示す傾向にあり，親族のなかでも配偶者に限定した依存傾向があることが示された．

○世代（年齢）の効果

年齢が高くなるに従って，たとえ対象が生存したとしても本人の親を相談相手として選択する傾向は弱くなる．また友人・知人を選択する傾向も若年層の方が強い．一方でその他親族に含まれる兄弟姉妹，子どもへの依存は高齢層ほど強まる．「仕事・職場」以外の相談内容については高齢層ほど親族のみによる相談相手をもつケースが多く，これは若い世代では配偶者，友人・知人，自分の親といった相手をサポートの担い手として選択しているのに対して，年齢が高くになる従って，友人・知人や自分の親から子どもへ対象を移行させている結果と考えることもできる．特に女性において，このようなサポートの担い手の変化と多様性の維持がスムーズに行われているように見受けられる．また年齢が高くにつれて，相談相手の続柄も同じような人々によって構成される傾向が強いことも示された．

○教育年数

パーソナル・ネットワークの規定要因として，学歴は多くの既存研究においてその効果が検証されてきた．本研究においても社会経済的地位としてコントロールした分析を行ったが，ここではその効果は限定的にしか析出されなかった．相談相手の選択において，教育年数が長いほど配偶者の選択確率が高く，一方でその他親族の選択確率が低いことが示された．従来の研究では高学歴者ほど親族に限定されない広範囲で多様なネットワークをもつことが明らかになっており，この傾向と近似しているのは後者，すなわち高学歴者ほど相談相手として兄弟姉妹，子どもを選ぶ確率が低いことである．本調査では相談相手として選択させる数を2人までと制限しており，サポート資源として親族への依存傾向が全体的に高い日本社会においては学歴の効果を析出するためにはより広範囲なネットワーク構造をとらえる必要があるといえよう．

○従業上の地位

無職，フルタイム雇用，パート・アルバイト，自営業主・家族従業者の各従業上の地位の効果は，相談内容によってその効果の方向も異なっており，相談相手の選択について一貫した傾向は示されていない．例えば，仕事・職場についての相談相手として，基準カテゴリであるフルタイム雇用，およびパート・アルバイトに比べて自営業主・家族従業者は本人の親を選択する傾向が強かったが，一方で恋愛・結婚・夫婦生活についての相談ではパート・アルバイトとともに他のカテゴリよりも本人の親を選択する確率が低くなっている．相談相手として配偶者の次に多く選択されていた友人・知人についても，従業上の地位による違いは相談内容によって異なっており，相談ネットワーク選択のなかでも相談の内容によって個人属性の効果は異なるという点は確認できたものの，一定の傾向については本研究では見出すことはできなかった．

本研究において明らかになった相談相手の選択における男性の配偶者に対する強い依存傾向は，女性の社会進出とともに男性も家庭内において家事や育児を分担していく必要があることを考慮すると，女性のみならず男性に対しても情緒的サポートを充実させていくことの必要性を示唆している．現在，家庭内において家事・育児行動の大半を担っている

女性は，本研究からも示されたように，配偶者を中心としながらも，相談内容ごとに親族，非親族を取り入れた多様な相談ネットワークをもっている．また，そのような情緒的サポートを求めることができるネットワークの充実は，育児への不安やストレスなどを軽減することを通じて女性の well-being を向上させる．もしそのような情緒的サポートの求め先として配偶者への依存が強い状態で男性が家事・育児参加といった家庭内労働に参入すると，配偶者以外からのサポートを頼ることができず，結果として夫婦間の平等な役割分担の妨げとなる可能性も考えられる．現在，子育てを中心として，女性を対象とした相談支援の体制は多くの自治体，保育機関において進められているが，同時に男性も利用可能な制度，設備を充実させることで，出産・育児をしながらの女性の就労を直接支援するような物理的・道具的サポートとともに，男性の家事・育児参加を支援するような情緒的・心理的サポート体制の拡充も今後検討していく必要があると思われる．

文献

稲葉昭英（1999）「なぜ常雇女性のストレーンが高くないのか？：大都市近郊」石原邦雄編『妻たちの生活ストレスとサポート関係：家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所, pp.53-85.

垣内国光・櫻谷真理子（2002）『子育て支援の現在：豊かな子育てコミュニティの形成をめざして』ミネルヴァ書房.

川浦康至・池田政子・伊藤裕子（1996）「既婚者のソーシャルネットワークとソーシャル・サポート：女性を中心に」『心理学研究』67（4），pp.333-339.

国立社会保障・人口問題研究所（2003）『現代日本の家族変動：第 2 回全国家庭動向調査（1998年社会保障・人口問題基本調査）』（財）厚生統計協会.

松田茂樹（2001）「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』52（1），pp.33-49.

松本康（1995）『増殖するネットワーク』勁草書房.

野口眞弓・新川治子・多賀谷昭，2000,「育児をする母親のソーシャル・サポートネットワークの実態」『日本赤十字広島看護大学紀要』1，pp.49-58.

大谷信介（1995）『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房.

仙田幸子，2002,「既婚女性の就業継続と育児資源の関係：職種と出生コーホートを手がかりにして」『人口問題研究』58（2），pp.2-21.

浦光博（1992）『支えあう人と人：ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社.

Fischer, Claude S. (1982) *To Dwell among Friends*, Chicago: The University of Chicago Press.

Marsden, Peter V. (1987) "Core Discussion Networks of Americans," *American Sociological Review*, 52, pp.122-133.

Thompson, J. V. (1989) "The elderly and their informal social networks," *Canadian Journal on Aging* 8, pp.319-332.

The Choice of Discussion Networks: From the Viewpoint of Gender and generation

Atsushi HOSHI

This paper provides an overview of individual's choice of advisers on various life situations and examines the socio-economic factors affecting individual's choice of advisers. It is based on a sample of male and female between 18 and 69 years of age, living in Japan conducted to obtain information about respondent's family and life.

The characteristics of discussion networks are shown to be associated with respondent's sex, age, education and occupational status. The findings are as follows: First, males tend to choose a spouse as an adviser more than females, even if it is what kind of contents of consultation. This tendency is consistent even when the socio-economic factors are controlled. Second, older respondents have tendency for the adviser to be constituted by relatives and family members more than younger respondents do. In especially females, respondents are maintaining diversity of network by changing an adviser with age. Third, although it was shown that individual's choice of advisers is influenced by education and occupational status, there is no specific tendency.

These results suggest the necessity for enriching affective support network not only to females but to males.